

極端反応傾向と個人主義関連特性との関連¹⁾

辻 本 英 夫

大阪市立大学

多段階尺度評定において尺度の極端な段階を好んで選択するという反応スタイルである極端反応傾向 (ERS) について、個人主義傾向や独自性欲求といった個人主義関連特性との関連を検討した。その結果、ERS と独自性欲求の下位特性である自由奔放との間に、低いながらも有意な正の相関が示された。さらに、過去の研究と同様、ERS と 5 因子性格検査 (FFPQ) の遊戯性、特にその下位尺度である奔放性との間にも、低い有意な正の相関が認められた。これらの結果から、開放性・遊戯性の個人主義傾向的側面と ERS とが関連するという辻本 (2003) の示唆を考察した。

キーワード：極端反応傾向、個人主義傾向、独自性欲求、開放性・遊戯性

多段階尺度評定における反応スタイルとして、尺度内容とは独立に尺度の両端の段階を好んで選択するという反応スタイルが知られている。この反応スタイルは極端反応傾向 (Extreme Response Style; ERS) と呼ばれている。経時的に安定した傾向であることから (e.g. Berg, 1953), ERS は個人の内的要因に起因すると考えられている。そのため、これまで長年にわたって、ERS を規定する内的要因を探る試みが行われてきた。しかしながら、性、適応水準、不安水準、知的水準、発達水準、社会経済的地位、文化差など非常に多岐にわたる要因と ERS との関連が示唆されており、また研究間で相反する結果が得られている例も散見されるなど (Hamilton, 1968), ERS を規定する内的要因は未だ明確にされていないというのが現状である。ERS 研究にこのような多様性と混乱とをもたらしている一因として、Hamilton (1968) は方法論的な問題点を指摘している。Hamilton が指摘した問題点

の中でも特に重要な問題点は、ERS 得点の算出に、ERS の測定自体を目的とした専用の尺度ではなく、態度やイメージの測定などの他の目的で開発された尺度が流用されているという、ERS 測定尺度の問題であろう。他の目的で開発された尺度に基づいて算出された ERS 得点には、ERS 自体に加えて、態度・イメージなどの強さといったその尺度本来の測定内容が混入している可能性が高く、ERS が正確に反映されていないと考えられるのである。Hamilton の指摘は 40 年近く前のことであるが、現在でも状況はあまり変わっていない (Clarke, 2000)。

このような研究状況の中で、辻本 (1998b, 1999, 2003) は、ERS 測定用の尺度をもちいて、ERS と 5 因子モデルによる性格特性との関連について組織的な検討を行った。使用された尺度は、Berg (1953) の尺度をもとに、辻本 (1998a) 自身によって構成された知覚反応検査や語反応検査であり、評定対象として抽象的な記号や無意味語をもちいることによって、評定対象となる刺激の内容の影響を最小限にとどめるよう工夫された尺度である。

1) 本研究の研究 1 の一部は、日本パーソナリティ心理学会第 13 回大会 (2004 年) において発表した。

これらの尺度に基づいて測定された ERS と、主要 5 因子性格検査, 5 因子性格検査 (FFPQ), 日本版 NEO-PI-R によって測定された性格の 5 因子との関連を検討した結果, 一貫して, ERS と遊戯性 (辻本, 1999, 2003) ないしは開放性 (辻本, 2003) の間に正の相関が見出された。なお, 辻本 (2003) によれば, 開放性と遊戯性の間には高い正の相関 ($r=.80$) があり, 両者はほぼ同一の因子であると考えられる²⁾。

さらに, 辻本 (2003) は, 開放性・遊戯性と ERS との間になぜ関連が認められるのかを考察し, 2 つの解釈の可能性を提示している。1 つ目は個人主義傾向に基づく解釈である。開放性・遊戯性の特徴の 1 つとして, 規範にとらわれない自由な態度表明といった個人主義傾向の特徴が考えられるが, それが明確な態度表明である極端な段階への反応につながるのではないかという解釈である。また 2 つ目は, 開放性・遊戯性のもつ「非日常的なもの」に対する関心・感受性の強さが, ERS 測定尺度で刺激として用いられている記号・語のような抽象的なものへの関心・興味にも結びつくのではないかという解釈である。

本研究では, これら 2 つの解釈のうち, 辻本 (2003) がより重視している前者を取り上げて検討する。この解釈の論拠を, 辻本 (2003) は概ね次のように説明している。まず, 項目内容とは無関係に尺度の極端な段階に反応する傾向である ERS は, 何事に対しても白黒を明確にしようとする態度の表れととらえることができる。そして, このような態度は, 集団の和を乱すものとして, わが国のような集団主義文化では受け入れられにくく, そのため, 一般に日本では, 極端な段階への反応を避ける傾向が見られるのではないかと考えられる。対して, 開放性・遊戯性の高い人の特徴の 1

つとして, 伝統的・常識的・規範的な考え方や行動にとらわれない点があげられる。すなわち, 開放性の高い人は, 集団の和を尊ぶといった規範にとらわれることなく自由に行動できる人であり, 多段階尺度評定においても敢えて極端な段階への反応を避けようとはしないが故に, 極端な段階への反応が増えるのではないかと推測される。

このように辻本 (2003) は, 比較文化心理学領域で提唱されている個人主義-集団主義傾向といった概念と結びつけて開放性・遊戯性と ERS の関連を解釈しているが, 過去に開放性・遊戯性と個人主義-集団主義傾向との関連を検討した研究はなく, 実際に両者の間にどのような関連があるのかは明らかではない。他方, ERS と個人主義-集団主義傾向との関連を検討した研究には, 日本, 台湾, アメリカ合衆国, カナダの高校生の間で ERS を比較した Chen, Lee & Stevenson (1995) がある。彼らは, 集団主義文化の国 (日本, 台湾) よりも個人主義文化の国 (アメリカ合衆国, カナダ) の方が ERS が高いという結果に加えて, 個人主義傾向と ERS との間に, 値は低い有意な正の相関があることを見出している。しかしながら, Chen et al. (1995) の研究には, ERS 専用尺度を使っていない, 個人主義-集団主義傾向測定尺度の α 係数が低いといった方法論的な問題があるので, これらの問題点を是正した追試が必要である。そこで本研究では, 個人主義-集団主義傾向やそれと概念的に関連すると考えられる独自性欲求, 相互独立的・相互協調的自己観を取り上げ, ERS および開放性・遊戯性との間にどのような相関関係が認められるのかを多面的に検討した。

研究 1

ERS と開放性・遊戯性との関連についての辻本 (2003) の個人主義傾向に基づく解釈を検討するために, ERS と個人主義傾向に関連する諸特性との関連を分析する。

2) 主要 5 因子性格検査, 5 因子性格検査 (FFPQ), 日本版 NEO-PI-R の相関関係を検討した大野木 (2004) の研究でも, 両者の間には高い相関 ($r=.655$) が得られている。

方 法

調査対象者および手続 調査対象者は大学生であり、大阪府下の総合大学の心理学関連科目の受講生に、後述する知覚反応検査 (PRT)、集団主義尺度、相互独立的・相互協調的自己観尺度、独自性欲求尺度、NEO-PI-R の 5 種類の評定尺度への回答を求めた。各評定尺度の有効回答数および調査対象者の性別の内訳は、PRT 222 名 (男性 121 名、女性 101 名)、集団主義尺度 230 名 (男性 129 名、女性 101 名)、相互独立的・相互協調的自己観尺度 229 名 (男性 128 名、女性 101 名)、独自性欲求尺度 238 名 (男性 137 名、女性 101 名)、NEO-PI-R 237 名 (男性 135 名、女性 102 名) であった。ただし、各尺度得点間の相関分析では、相関をとる変数の組み合わせによって有効回答数が異なるため、有効回答数はその都度明記する。PRT、相互独立的・相互協調的自己観尺度、集団主義尺度については、同一授業時間内に実施した。なお回答者の負担と授業の都合を考慮して、独自性欲求尺度は PRT 等を行った日の約 6 週間前に、NEO-PI-R は約 4 週間前に実施した。

ERS 測定尺度・測度 ERS の測定には、辻本 (2003) と同じく、知覚反応検査 (Perceptual Reaction Test; PRT) をもちいた。PRT は ERS 測定を目的として辻本 (1998a) によって尺度構成されたものであり、60 個の抽象的記号 (シンボル) に対する好悪を、かなり嫌い - やや嫌い - 全く中間 - やや好き - かなり好きの 5 段階で評定させるものである。具体的な ERS 測度としては、従来一般的に使用されている極端反応数と偏差得点の両測度をもちいた。極端反応数は、PRT の 60 項目のうち、両端の段階が選択された項目の度数を ERS 得点とするものである。偏差得点は、PRT の項目ごとに、中央の段階を選択した場合を 0 点、その両隣の段階を選択した場合を 1 点、両端の段階を選択した場合を 2 点として得点化された項目得点の合計である。両測度間には高い相関があり、両 ERS 測度とも、再検査信頼性、収束の妥当性は実用的な水

準にあることが示されている (辻本, 1998a)。

特性尺度 個人主義 - 集団主義傾向を測定する尺度として、Yamaguchi, Kuhlman & Sugimori (1995) の集団主義尺度 (5 件法, 14 項目) をもちいた。なお、訳語については、大石 (2001) によった。加えて、前述したように ERS と個人主義傾向の関連を多面的に検討するために、個人主義 - 集団主義傾向に関連する概念として、相互独立的・相互協調的自己観と独自性欲求を取り上げた。高田 (2000) によれば、相互独立的自己観とは「自己を他者から分離した独自の実体として捉える」見方であり、相互協調的自己観とは「他者と互いに結びついた人間関係の一部として自己を捉える」見方であって、それぞれ個人主義文化・集団主義文化で共有されている自己に対する見方をいう。また、独自性欲求は自己が他人と異なっていることを願う欲求である (岡本, 1991, p. 1)。個人の独自性を重視するか他者との人間関係を重視するかという点で、これらの特性は相互に関連すると考えられる。これらの具体的な測定には、それぞれ、高田 (2000) の相互独立的・相互協調的自己観尺度 (5 件法, 20 項目)、岡本 (1991) の独自性欲求尺度 (5 件法, 32 項目) をもちいた。

また、ERS と開放性との関連を確認するために、日本版 NEO-PI-R (下仲・中里・権藤・高山, 1999; 5 件法, 240 項目) をもちいた。周知のように、日本版 NEO-PI-R は、5 因子モデルに基づく代表的な性格検査の 1 つであり、21 歳から 87 歳までの幅広い年齢層の回答者をもちいて標準化され、尺度 (ドメイン)・下位尺度 (ファセット) とともに、概ね十分な信頼性が得られている。因子の妥当性、併存的妥当性についての検討も十分に行われている。

結果と考察

まず、2 種類の ERS 測度の基礎統計量を求めた ($N=222$)。極端反応数・偏差得点の平均 (標準偏差) はそれぞれ 13.1 (12.9)、56.0 (22.1) と、過去の研究結果 (辻本, 1998a, 1998b, 1999, 2003) とは

ば同程度の値が得られた。同じく過去の研究結果と同様、両測度の積率相関係数は.89、偏差得点の α 係数は.96と高い正の値を示した。

つぎに、各特性尺度の因子構造を確認するために、NEO-PI-Rを除くそれぞれの尺度ごとに主因子法-プロマックス回転による因子分析を適用した。集団主義尺度、相互独立的・相互協調的自己観尺度については、あらかじめ想定されていた因子(「集団主義傾向」および「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」とほぼ同一の因子が抽出された。独自性欲求尺度に関しては、スクリーテストなどの結果から、「意見表明」「規範遵守」「評価懸念」「自由奔放」因子からなる4因子構造、ないしは1因子と考えられたので、両因子数で尺度化した。いずれの尺度についても、因子負荷の絶対値が0.3以上の項目を用いて尺度得点を算出した。なお、NEO-PI-Rについては、標準化され市販されている性格検査であることから、標準的な手続きに基づいて尺度・下位尺度得点を算出して分析にもちいた。次いで、本研究の主目的であるERSと各特性との関連を検討するために、PRTの極端反応数・偏差得点と各特性尺度得点との相関を求めた。その結果をTable 1に示す。Table 1には各特性尺度の α 係数も併せて示した。

極端反応数に関しては、「相互協調的自己観」、独自性欲求の「規範遵守」「評価懸念」を除くすべての特性尺度得点との間に、辻本(2003)の解釈から予想される相関関係に一致した有意な相関が得られた。しかしながら、偏差得点との間でも有意な相関が得られたのは独自性欲求の「意見表明」と「自由奔放」のみであった。また、いずれの相関係数の値も低い。これらの中では、ERSと最も高い関連を示したのは「自由奔放」であったが、同尺度は α 係数の値が低く、信頼性の点でやや問題がある。NEO-PI-Rの開放性との関連については、辻本(1999, 2003)の結果とは異なり、極端反応数・偏差得点のいずれとの間にも有意な相関は認められなかった。開放性の下位尺度との間で

Table 1 ERS得点-個人主義関連尺度・NEO-PI-R尺度得点間相関(研究1)

変数	PRT		N	α
	極端反応数	偏差得点		
集団主義傾向	-.17*	-.11	220	.74
相互独立 ^{a)}	.16*	.12	219	.74
相互協調 ^{a)}	.06	.07	219	.77
独自性欲求	.15*	.13	173	.86
意見表明	.15*	.16*	173	.80
規範遵守	.09	.07	173	.78
評価懸念	-.03	-.04	173	.62
自由奔放	.20**	.19*	173	.59
(NEO-PI-R)				
神経症傾向 N	.17*	.10	176	.93
外向性 E	.14	.15*	176	.92
開放性 O	.05	.04	176	.86
調和性 A	-.13	-.06	176	.86
誠実性 C	.03	.04	176	.92
空想 O1	-.01	.01	176	.74
審美性 O2	.01	.02	176	.78
感情 O3	.19*	.15	176	.71
行為 O4	.07	.06	176	.49
アイデア O5	-.05	-.07	176	.74
価値 O6	.03	.00	176	.47

a) 相互独立/相互協調 = 相互独立的/相互協調的自己観。

* $p < .05$, ** $p < .01$

は、「感情」と極端反応数の間にしか有意な相関は得られなかった。

以上のように、辻本の解釈に対してここでの分析の結果では、一部その解釈に沿った結果が示されたものの、全体としては辻本の解釈を支持するような結果は得られなかったと言わざるをえない。しかしながら、最終的な結論を出す前に3点ほど考慮すべき点があるように思われる。1点目は、ここでもちいた集団主義尺度では、準拠集団として友人集団を想定させている点である。準拠集団には、地域、サークル、会社などさまざまな集団が考えられるので、友人集団に基づく集団主義傾向のみの検討では不十分であろう。たとえば、ほぼ同年齢で構成される友人集団は基本的に上下関係のない集団と言えるが、年齢や地位といった点

で上下関係を含む集団を想定させた場合には、異なる結果となることも考えられる。2点目は、ERSとNEO-PI-Rの開放性との間に、有意な相関が認められなかった点である。辻本(2003)の研究2.3では一貫して有意な相関が得られているので、本研究で両者の間に有意な相関が認められなかったのは、標本変動によるとも考えられる。とすれば、同様な標本変動が、ERSと個人主義関連尺度との間の相関分析に何らかの影響を与えている可能性も考えられる。あるいは、開放性・遊戯性の下位特性の中でも、ERSとの間で有意な相関を示した独自性欲求の「自由奔放」と関連するような下位特性が特にERSと関連しているのならば、そのような下位特性が下位尺度として明示的に構成されていないNEO-PI-Rの開放性尺度の場合には、ERSとの相関がより標本変動の影響を受けやすいのかもしれない。3点目は、独自性欲求尺度の「評価懸念」「自由奔放」の両下位尺度の信頼性が低い点である。これらの点を考慮して、さらにERSと個人主義傾向との関連を検討する必要がある。

研究2

研究1の方法論上の問題点を改善した上で、あらためてERSと個人主義傾向に関連する諸特性との関連を分析する。改善点として、まず集団主義尺度については、想定させる集団として、友人集団に加えてクラブ・サークルを追加する。また、性格検査として、NEO-PI-Rではなく、FFPQを実施する。さらに、独自性欲求尺度の信頼性を高めるため、「評価懸念」「自由奔放」を反映する項目を追加する。

方法

調査対象および手続 研究1とは異なる大阪府下の総合大学の心理学関連科目の授業時間内に、受講生を対象として、後述する5因子性格検査FFPQ、独自性欲求尺度、集団主義尺度2種類、知覚反応検査(PRT)を実施した。有効回答数は、FFPQ 200名(男子107名、女子93名)、独自性

欲求尺度 198名(男子106名、女子92名)、友人集団を想定対象とする集団主義尺度 201名(男子108名、女子93名)、クラブ・サークルを想定対象とする集団主義尺度 198名(男子105名、女子93名)、PRT 191名(男子101名、女子90名)であった。なお、各尺度得点間の相関分析の有効回答数はその都度明記する。

ERS測定尺度・測度および特性尺度 研究1と同様、ERSの測定にはPRT、ERS測度としては極端反応数と偏差得点をもちいた。

個人主義傾向に関連する尺度として、山口・岡・丸岡・渡辺・渡辺(1988)の集団主義尺度(5件法、10項目)³⁾と岡本(1991)の独自性欲求尺度(5件法、37項目)を、いずれも少し改変して使用した。集団主義尺度に関しては、想定させる集団として、基本的に上下関係のない友人集団に加えて、上下関係を含みかつ大学生になじみのある集団としてクラブ・サークルをも提示し、それぞれ別個に評定させた。クラブ・サークルの場合には、これまでにクラブやサークルに所属したことがない場合には回答しないよう求めた。また、岩男(1994)に準じて、一部項目の逆転項目化と項目順序の変更を行った。

独自性欲求尺度については、研究1の結果で特に「評価懸念」「自由奔放」の両下位尺度の信頼性が低かった点を考慮して、宮下(1991)、山岡(1993)を参考にしながら、両因子を反映すると考えられる項目を5項目ずつ追加した。また、研究1の因子分析結果でどの因子にも低い負荷しか示さなかった項目を削除するとともに、項目内容を表す文が長いものについては、文意を変えない範

3) 研究1と異なる尺度をもちいたのは、研究1で使用したYamaguchi et al. (1995)の集団主義尺度では、各項目に「友人集団」という言葉がもちいられ、対象として想定させる集団が友人集団に限定されているためである。研究2で使用した山口ら(1988)の集団主義尺度では、友人集団に限定せず単に「集団」と表現されている(Table 3参照)。

囲で簡潔な文に書きあらためた。その上で、全項目をランダムに並べて質問紙を作成した。

また、ERSと遊戯性との関連を確認するために、FFPQ（改訂版；FFPQ研究会，2002；5件法，150項目）をもちいた。日本版NEO-PI-R同様、FFPQも、5因子モデルに基づく本邦の代表的な性格検査の1つである。信頼性・妥当性の検討，標準化の作業を経て市販されており，広く国内で使用されている性格検査である。本尺度は，開放性に対応する特性である遊戯性の下位特性の1つとして，「奔放」が想定されている。

結果と考察

2種類のERS測度の基礎統計量は以下の通りであった（ $N=191$ ）。極端反応数・偏差得点の平均（標準偏差）はそれぞれ11.2（10.6），52.4（20.1）であり，研究1や過去の研究結果（辻本，1998a，1998b，1999，2003）とほぼ同程度の値であった。同様に，両測度の積率相関係数や偏差得点の α 係数も，それぞれ.88，.95と高い正の値を示した。

独自性欲求尺度と2種類の集団主義尺度については，あらためて主因子法－プロマックス回転による因子分析を行った。独自性欲求尺度については，スクリーテストなどの結果から3因子解を採用した。得られた因子パターン行列をTable 2に示す。各因子に高い負荷を示す項目内容から，第1因子は「意見表明」，第2因子は「自由奔放」，第3因子は「評価懸念」の因子と解釈できよう。

集団主義尺度に関しては，集団として友人の集まりを想定させた場合と，クラブやサークルを想定させた場合に分けて因子分析を行った。スクリーテストなどの結果から，友人の集まりを想定させた場合は1因子解，クラブやサークルを想定させた場合は2因子解と考えられた⁴⁾。結果として得られた因子パターン行列をTable 3に示す。友

人の集まりを想定させた場合の1因子は当然「集団主義傾向」と解釈されるが，クラブやサークルを想定させた場合と区別するためにここでは「水平的集団主義傾向」とする。クラブやサークルを想定させた場合の2つの因子の違いはあまり明確ではないが，ここでは第1因子を「垂直的集団主義傾向」，第2因子を「個人主義傾向」とする⁵⁾。

以上の因子分析結果に基づき，因子負荷が3以上の項目の得点を合計して得点化するという形で，独自性欲求尺度ならびに集団主義尺度の各下位尺度の尺度構成を行った。FFPQについては，NEO-PI-Rと同じく標準化され市販されている性格検査であることから，標準的な手続きに基づいて尺度・下位尺度得点を算出して分析にもちいた。各尺度の α 係数はTable 4に示した通りである。

次に，ERSと独自性欲求，集団主義傾向との関連を検討するために，PRTの極端反応数・偏差得点と各特性尺度得点との積率相関係数を求めた。Table 4がその結果である。研究1と同じく，値自体は低いものの，独自性欲求の下位尺度「自由奔放」との間に，極端反応数・偏差得点ともに有意な正の相関が認められた。しかしながら，他の特性尺度との間には有意な相関は示されず，辻本（2003）の解釈を全面的に支持する結果は得られなかった。

Table 4にはまた，FFPQの尺度・下位尺度得点との相関も示した。今回の結果では，遊戯性尺度得点との間に，ERSの両測度得点とも有意な正の相関が得られた。これは，先行研究（辻本，1999，2003）と一致する結果である。また，遊戯性の下位尺度との間では，「内的敏感」「奔放」の2つの下位尺度で，極端反応数・偏差得点のいずれにも

4) 1因子か2因子の可能性が考えられたが，因子数推定の目安としてもちいたすべての統計指標（スクリーテスト，MAP，並行分析）が2因子を示唆したために，2因子解を採用した。

5) 因子名の「水平的」「垂直的」というラベルは多分に便宜的ではあるが，上下関係という垂直的關係を含むか含まないかという点から，友人集団を対象とした場合に得られた集団主義因子を水平的集団主義，クラブ・サークルを対象とした場合に得られた集団主義を垂直的集団主義とした。

Table 2 独自性欲求尺度の因子パターン行列 (研究 2; N=198)

項目	因子			共通性
	1	2	3	
21 人がどういう意見を言っているかが、自分の意見は表明する方である	.87	-.03	.19	.79
13 ミーティングなどの集まりで、誤りだと思われるような意見を言っている人がいると、反対意見を述べる	.64	-.03	.13	.42
27 知らない人ばかりのグループのなかでも、ちゅうちょせず自分の意見を述べる	.62	-.12	-.02	.40
15 自分より上の人や、経験の深い人の前では、あまり自分の意見を言わない方である	-.61	.09	.12	.39
6 先輩と意見がくいちがったときに、自分の意見を言わないままにしておくことはあまりない	.60	-.16	-.08	.39
25 人の意見に反対して、いやな人だと思われるより、いつも賛成している方が良い	-.52	.00	.32	.38
37 グループと一緒にいるとき、けんかなどにならないように、彼らに賛成している	-.44	.06	.25	.26
11 我を通すことをあまり好まない	-.44	-.27	-.08	.27
33 反対意見に対して、自分の意見を強く弁護することが多い	.38	.06	.31	.24
31 そうすることが望ましくない結果を招きそうなときは、自分の考えていることを口に出すことができない	-.37	-.03	.16	.16
22 いつも新しいアイデアを試みる人間だと、人に思われたい	.30	.01	.25	.15
1 自分の考えが役に立たないかもしれないと思って、実行に移すのをためらうことがある	-.27	.23	.16	.15
36 自分のことは自分で決めないと気がすまない	.21	.19	.12	.10
5 厳しい規則や、きまりの下で働くのは得意でない	-.09	.65	.06	.43
20 勝手気ままにふるまうことが多い	.18	.62	.05	.42
2 集団活動に参加するとき、どちらかといえば、集団に同調しない方である	.02	.56	-.05	.31
34 他人に指図されるのは嫌いだ	.07	.53	.37	.43
32 いつも規則を守ろうとする	.05	-.49	.12	.26
35 非人間的な社会にいつも従っているよりも、たまには規則を破る方がよい、と思う	-.07	.43	.01	.19
12 人生のいろいろなことで賭をやるよりも、むしろ安全主義である	-.16	-.40	.12	.20
4 人に評価されることは好きではない	-.28	.37	-.18	.25
18 他人からの忠告はあまり重視しない	-.06	.35	.04	.13
29 人に、私が社会の習慣や伝統を軽視する人間だ、と思われるのはいやだ	.07	-.33	.18	.15
24 社会的な成功を望むよりも自由奔放に生きたい	-.21	.33	-.08	.16
23 教師や法律家や「教養人」の威厳を傷つけて愉快に感じるのがたまにある	.02	.32	.16	.13
8 社会の規則や基準にいつも従わなければならないわけではないと思う	-.04	.26	-.07	.08
3 あまり変わったことを人に言うのは好きではない	-.20	-.24	.19	.13
26 批判されると自尊心を傷つけられる	.03	.17	.67	.47
28 他人が自分に反対すると、いやな気持ちになる	.05	.04	.66	.44
16 自分に対する他人の評価が気になる	-.03	-.18	.51	.29
30 ついつい自分と他人を比較してしまう	.00	-.06	.50	.26
14 人が大勢いる中で「違和感」を感じると、いやな気持ちになる	-.11	.08	.47	.24
10 誰からも嫌われたくない	-.11	-.22	.45	.26
7 他人にどう思われようとあまり気にならない	.18	.19	-.38	.21
9 制服やユニフォームを着ると、そのメンバーであることにプライドを感じる	.18	-.18	.31	.17
19 人から「変わり者」と言われるよりは、皆と同じようにしている方が良い	-.20	-.25	.28	.18
17 仕事で成功するということは、他人の出来なかったような貢献をすることであると思う	.13	.08	.19	.06
	因子間相関	1	2	
	2	.34		
	3	-.30	-.19	

有意な正の相関が認められた。特に「奔放」で ERS との有意な相関が示されたことは、独自性欲求尺度の「自由奔放」との間にも有意な相関が示

されたことを考え合わせると、遊戯性という性格特性の中でも特に奔放さという側面が ERS と関連することを示唆する結果であると言える。

Table 3 集団主義尺度の因子パターン行列 (研究2)

項目	因子		
	友人集団 ^{a)}	クラブ・サークル ^{a)}	
	1	1	2
1 集団の仲間と意見の不一致を生じないようにする	.38	-.09	-.61
2 自分の集団の決定を尊重する	.39	.34	-.30
3 自分の集団が間違っているときには、集団を支持しない	-.51	-.08	.54
4 自分の集団に不満でも、必要とされればその集団に留まる	.43	.59	.16
5 自分の集団の和を保っている	.42	.47	-.06
6 集団の仲間と非常に意見が違っているときは、仲間と反対の意見を主張する	-.30	.05	.60
7 多数の人の意見に合わせて、自分の意見を変えることはない	-.15	.01	.52
8 困難な状況にあっても自分の集団に留まる	.41	.76	.17
9 集団の仲間の望むよう行動する必要はないと思う	-.55	-.55	.20
10 自分の集団のために自分の利益を犠牲にすることはない	-.42	-.68	.04
	因子間相関	-.23	

a) N=201 (友人集団の場合), N=198 (クラブ・サークルの場合).

Table 4 ERS 得点 - 個人主義関連尺度・FFPQ 尺度得点間相関 (研究2)

変数	PRT		N	α
	極端反応数	偏差得点		
水平的集団主義 ^{a)}	-.07	.03	183	.66
垂直的集団主義 ^{a)}	.10	.09	182	.75
個人主義傾向	.10	.07	182	.66
意見表明	.15	.07	182	.81
自由奔放	.17*	.19*	182	.74
評価懸念	.02	.09	182	.74
(FFPQ)				
外向性 Ex	-.03	-.03	182	.84
愛着性 A	-.09	-.09	182	.83
統制性 C	-.03	-.04	182	.89
情動性 Em	.10	.11	182	.91
遊戯性 P	.19*	.20**	182	.80
進取 P1	.11	.08	182	.56
空想 P2	.02	.04	182	.68
芸術への関心 P3	.11	.14	182	.80
内的敏感 P4	.18*	.19**	182	.69
奔放 P5	.19**	.21**	182	.43

a) 水平的/垂直的集団主義 = 水平的/垂直的集団主義傾向.

* $p < .05$, ** $p < .01$

最後に、ERS と独自性欲求、集団主義傾向、性格特性の関係についての結果の解釈の参考とするために、集団主義、独自性欲求の下位尺度ならび

に FFPQ の尺度・下位尺度間の積率相関係数を求めた (Table 5). ERS と有意な相関を示した独自性欲求の「自由奔放」に着目して結果を見ていくと、まず、「水平的集団主義傾向」「垂直的集団主義傾向」とは負の、「個人主義傾向」とは正の有意な相関が得られている。ただ、相関係数の値自体はそれほど高い値ではない。FFPQ との間では、愛着性 (協調性)⁶⁾および統制性 (勤勉性)⁷⁾との間に中程度の負の有意な相関が認められた。他者との協調性が低く勤勉でない人ほど自由奔放であることを示しており、それぞれの特性の特徴から言って納得のいく結果である。遊戯性との間には有意な相関は示されなかったが、その下位特性である「奔放」との間には正の有意な相関 ($r = .33$, $p < .05$) が認められた。これは、遊戯性という性格特性の中でも特に奔放さという側面が ERS と関連することを裏づける結果と言えよう。

総合討論

本研究では、ERS と開放性・遊戯性との関連に

- 6) FFPQ の「愛着性」は、一般的には協調性・調和性と呼ばれる因子に対応する因子である。
- 7) FFPQ の「統制性」は、一般的には勤勉性・誠実性と呼ばれる因子に対応する因子である。

Table 5 個人主義関連尺度・FFPQ 尺度得点間の相関 (研究 2; N=177)

変数	水平的集団主義 ^{a)}	垂直的集団主義 ^{a)}	個人主義傾向			
垂直的集団主義	.24**					
個人主義	-.35**	-.17*				
意見表明	-.46**	-.06	.44**			
自由奔放	-.24**	-.22**	.19*			
評価懸念	.14	.25**	-.16*			
変数	水平的集団主義	垂直的集団主義	個人主義傾向	意見表明	自由奔放	評価懸念
外向性 Ex	-.15*	.11	.18*	.47**	-.06	.10
愛着性 A	.29**	.18*	-.05	-.03	-.45**	.07
統制性 C	.06	.08	-.03	.05	-.50**	-.01
情動性 Em	-.03	.11	-.04	-.21**	.09	.42**
遊戯性 P	-.14	.00	.13	.25**	.11	.03

a) 水平的／垂直的集団主義 = 水平的／垂直的集団主義傾向。
* $p < .05$, ** $p < .01$

ついでに辻本 (2003) の個人主義傾向に基づく解釈を検討するために、ERS と個人主義-集団主義傾向および関連特性との関係を分析した。まず、この解釈の基になっている ERS と開放性・遊戯性との関連については、性格検査として NEO-PI-R をもちいた場合には有意な相関が認められなかった (研究 1) もの、FFPQ をもちいた場合には有意な相関が示された (研究 2)。さらに ERS と遊戯性の下位特性の間の関連については、これまでの研究結果 (辻本, 1999, 2003) とは必ずしも完全に一致した結果ではないものの、ERS と「奔放」との間に関連が認められたという点では、一致した結果が得られている。ただし、辻本 (2003) 同様、本研究でも、「奔放」尺度が信頼性の低さという問題を有していることが示された。

研究 1 で ERS と開放性の間に有意な相関が見られなかった原因としては、先にも述べたように、辻本の一連の研究においては一貫して両者の間に有意な相関が得られていることから考えれば、標本変動によるものと考えられる。しかしながら、同時に、開放性と遊戯性との微少な差異によるという可能性も完全には否定できないであろう。なぜならば、下位特性に着目すると、ERS と有意な

相関を示した遊戯性の下位尺度「内的敏感」「奔放」のうち、「奔放」に対応する下位尺度が NEO-PI-R の開放性の下位尺度の中には、概念的にも経験的にも (辻本, 2003) 見出だせないからである。この点に関しては、今後さらにデータを積み重ねて検討を加えていく必要がある。

次に、本研究の主目的である ERS と個人主義傾向および関連特性との関係については、研究 1・2 を通じて、ERS と独自性欲求の下位特性「自由奔放」との間に有意な相関が得られた。この「自由奔放」という特性は遊戯性の下位特性「奔放」と概念的に類似した特性であり、また、データ上でも、「自由奔放」と「奔放」の間には有意な正の相関が認められた。したがって、この結果からも、遊戯性の下位特性の中でも特に「奔放」が ERS と関連していることが示唆される。さらに、辻本 (2003) の解釈の論拠の 1 つは ERS と「奔放」とが関連する点にあり、それを裏づける結果として ERS と「自由奔放」との間に関連が認められた点から言えば、辻本 (2003) の解釈に沿った結果であると言えよう。

しかしながら、個人主義-集団主義傾向や他の関連特性と ERS との間には明確な関連が認められ

ず、総体的には、辻本 (2003) の解釈から予想されるような結果は得られなかった。個人主義-集団主義傾向については、準拠集団として友人集団を想定させた場合でもクラブ・サークルを想定させた場合でも、研究1での極端反応数との相関を除いて、有意な相関は得られなかった。この結果は、Chen et al. (1995) とは異なる結果である。使用した集団主義尺度、ERS 測定尺度の違いがこのような結果の違いをもたらしたと考えられるが、特に、彼らがもちいた ERS 測定尺度は本来 ERS 測定を目的に構成された尺度でないため、その尺度本来の測定内容の混入によって結果が歪められた可能性があると推測される。他の特性では、独自性欲求の下位特性である「意見表明」が、研究1では ERS との間に有意な相関を示したものの、研究2では有意な相関を示さず、ERS と明確な関連は認められなかった。

ERS と関連が認められた独自性欲求の下位特性「自由奔放」と5因子モデルによる性格特性との関連をみると、「自由奔放」は、愛着性および統制性と中程度の負の相関を示しており、分離性（非愛着性）・自然性（非統制性）との関連が強い。FFPQ の手引き（FFPQ 研究会, 2002）によれば、分離性とは「自己を他者から切り離して、他者とは異なる自己の独立性を強調し、自主独立的行動をとろうとする傾向」であり、自然性とは「非統制的で、人為的な統制を好まず、自己自身をも自然の一部と見なして、自然による秩序があるがままに受け入れようとする」傾向である。したがって、「自由奔放」という特性は、他者の思惑や規律・規範といったものに頓着せずに自由気ままに行動するという特徴を表す特性なのではないかと考えられる。

対照的に、ERS と関連が認められなかった独自性欲求の他の下位特性においては、「意見表明」「評価懸念」とも愛着性・統制性とはほぼ無相関である。「意見表明」は、外向性と中程度の正の相関を示しており外向性との関連が強く、「評価

懸念」は情動性（神経症傾向）⁸⁾と関連が強い。外向性は対人関係に係わる特性であり「活動水準の高さの次元を代表している」（FFPQ 研究会, 2002）特性であるので、「意見表明」は、集団の中で意見や態度を積極的に表明するか控えるかといった対人関係における積極性・消極性を反映していると考えられる。「自由奔放」と対比させて言えば、「意見表明」の強い人は、「自由奔放」な人のように自分の周りの人間関係に無頓着なのではなく、それを考慮した上で意見・態度を積極的に表明しようとするのではないだろうか。他方、情動性はストレス・脅威に対する「敏感さや情動反応の強さの次元を代表している」（FFPQ 研究会, 2002）特性であることから、「評価懸念」の弱い人は、他者からの評価に対してあまり敏感ではなくストレスを感じない人であると考えられる。しかしながら「自由奔放」と対比的に考えるのならば、他者からの評価に左右されないだけであって、必ずしも他者との関係に無頓着というわけではないように考えられる。

個人主義-集団主義傾向については、5因子モデルによる性格特性との関連は、愛着性や外向性と弱い相関関係がみられるもののあまり明確ではない。ただ、水平的集団主義傾向、個人主義傾向については、独自性欲求との関連を見ると「自由奔放」よりもむしろ「意見表明」との関連が強いことがわかる。したがって、本研究でもちいた集団主義尺度で測定されるこれらの特性は、「意見表明」と同様に、集団の中で意見や態度を積極的に表明するか控えるかといった対人関係における積極性・消極性をより強く反映しているとも考えられる。

個人主義-集団主義傾向や独自性欲求の下位特性がこのような特徴をもつ特性であるとするれば、本研究で個人主義-集団主義傾向や「意見表明」

8) FFPQ では「情動性」という名称がもちいられているが、「神経症傾向」の方がより一般的である。

「評価懸念」と ERS との間に有意な相関が得られなかったことは、必ずしも辻本 (2003) の解釈を全面的に否定することにはならないであろう。本研究は仮説検証を目的として計画されたものではないので、むしろ、ERS が「自由奔放」と関連するという結果を辻本の解釈の部分的な支持ととらえ、両者の関連をさらに詳細に検討していくことが、今後の課題として重要なことであろう。

また、ERS と「自由奔放」との間に有意な相関が得られたとは言え、その相関係数の値は低い。このことは、ERS が複数の規定要因をもつことを推測させる。辻本 (2003) のもう 1 つの抽象嗜好に基づく解釈の可能性の検討も含めて、他の規定要因を探ることも、ERS 研究の今後の課題である。

引用文献

- Berg, I. A. 1953 The reliability of extreme position response sets in two tests. *Journal of Psychology*, **36**, 3-9.
- Chen, C., Lee, S., & Stevenson, H. W. 1995 Response style and cross-cultural comparisons of rating scales among east Asian and north American students. *Psychological Science*, **6**, 170-175.
- Clarke, I. III 2000 Extreme response style in cross-cultural research: An empirical investigation. *Journal of Social Behavior and Personality*, **15**, 137-152.
- FFPQ 研究会 (編) 2002 改訂 FFPQ (5 因子性格検査) マニュアル 北大路書房
- Hamilton, D. L. 1968 Personality attributes associated with extreme response style. *Psychological Bulletin*, **69**, 192-203.
- 岩男征樹 1994 集団主義尺度 堀 洋道・山本真理子・松井 豊 (編) 心理尺度ファイル——人間と社会を測る 垣内出版 Pp. 476-479.
- 宮下一博 1991 大学生の独自性欲求の類型化に関する研究 教育心理学研究, **39**, 214-218.
- 大石千歳 2001 集団主義尺度 (改訂版) 堀 洋道 (監)・吉田富二雄 (編) 心理測定尺度集 II 人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉サイエンス社 Pp. 242-245.
- 大野木裕明 2004 主要 5 因子性格検査 3 種間の相関的資料 パーソナリティ研究, **12**, 82-89.
- 岡本浩一 1991 ユニークさの社会心理学 川島書店
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 1999 NEO-PI-R, NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理
- 高田利武 2000 相互独立的-相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, **8**, 145-163.
- 辻本英夫 1998a 極端反応傾向測定尺度 WRT・PRT 日本語版の信頼性・妥当性の検討 性格心理学研究, **7**, 33-41.
- 辻本英夫 1998b 総合的性格検査で測定される性格特性と極端反応傾向との関連 人文研究 (大阪市立大学文学部紀要), **50**(2), 19-31.
- 辻本英夫 1999 極端反応傾向と 5 因子モデルによる性格特性との関連 人文研究 (大阪市立大学文学部紀要), **51**(10), 79-90.
- 辻本英夫 2003 極端反応傾向と開放性・遊戯性・外向性 パーソナリティ研究, **12**, 14-26.
- 山口 勸・岡 隆・丸岡吉人・渡辺 聡・渡辺久哲 1988 合意性の推測に関する研究 (I)——集団主義的傾向との関連について 日本社会心理学会第 29 回大会発表論文集, 176-177.
- Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. 1995 Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **26**, 658-672.
- 山岡重行 1993 ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究, **9**, 181-194.

— 2005. 10. 5 受稿, 2006. 1. 14 受理—

Relationships between Extreme Response Style and Individualism-related Traits

Hideo TSUJIMOTO

Osaka City University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 14 No. 3, 293-304

Extreme response style (ERS) is the tendency to use frequently extreme alternatives of a rating scale for any specific item content. The purpose of this study was to explore relationships between ERS and individualism-related traits including individualism orientation and need for uniqueness. The results showed that, although the coefficient of correlation was not high but significant, ERS correlated positively with “free-spirit,” a sub-trait of need for uniqueness. As with previous studies, ERS also correlated with playfulness of Five-Factor Personality Questionnaire (FFPQ), and specifically with “fugue,” a sub-trait of playfulness. Based on these results, we discussed Tsujimoto’s (2003) suggestion for the relationships between ERS and individualism orientation facet of playfulness.

Key words: extreme response style, individualism orientation, need for uniqueness, openness/playfulness